

大学での学習研究活動を支える日本語能力の分析

富谷 玲子・高木南欧子

近年、仲間と意見を交換し、知識やストラテジーを共有しつつ学習を行う学習方法についての研究が盛んとなり、教材なども出版されるようになってきた。本研究では、このような学習形態を「協同学習」と呼んでいるが、この学習方法では、学習過程における相互行為の中で個々の理解が深まり、新たな意味理解への発展が促されると考えられている。本研究においては、このような学習において行われる学習者の発話の実態を分析することを目的とし、教育活動への応用、カリキュラムの開発を目指している。

学習中の発話を観察した結果、活発な発話が続

く場面と、逆に沈黙が続く場面とが見られたが、学習者によって、発話、および沈黙へのかかわり方は様々であり、学習中の沈黙も様々な解釈が可能であることが分かった。これらのことは、協同学習の一形態である「ピア・リーディング」や「ピア・ラーニング」が広い知識や創造が要求される課題において有効だと言われていることと関連があると思われる。現在、さまざまな機関で学習者コーパスが整備されているが、今後はこれらとの比較なども行い、さらなる実態の解明をめざしていきたい。
